様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究(A)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｈ０５９４２

研究課題名（和文）世界を目指すサッカーコーチのための英語力向上プログラム

研究課題名（英文）Teaching instructional spoken English using the genrebased approach in English for specific purposes: Language instruction for soccer players and coaches going overseas

研究代表者
西条　正樹（Nishijo, Masaki）

立命館大学・OIC総合研究機構・プロジェクト研究員

研究者番号：８０７０６６１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：社会的・文化的コンテクストが反映された言語データを学習教材として用いるジャンルベースドアプローチ（GBA)を英語教育に採用することにより，将来海外でサッカーのコーチやプレーヤーになることを目ざす社会人や学生が，英語発話能力をどのように自己開発したかについて調査した。研究参加者は教材を用いた屋内学習に加えて、屋外実習でモデルコーチによる英語コーチングを，15週に渡り体験した。質問紙調査から、コーチング英語特有のジャンル構造と語彙文法資源についての認識が学習前期，中期，後期を通して高まったことが示された。また，それらの認識の変化が学習者のパフォーマンスにも影響を及ぼすことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究により，GBAによる明示的学習で参加者のジャンル構造と語彙文法資源への認識を高めることで，パフォーマンステストで向上が見込める学習項目とそうではないものとがあることが示唆された。特に，学習者が目の前の状況（特に，動作や様態）をいかに即座に言語として表現できるかが大きな課題であることが分かった。
　現在，海外のノンアカデミックな分野の留学希望者が増加傾向にあり，彼らをさまざまな面からサポートする留学支援体制構築の必要性は，今後ますます高まると予想される。本研究では，その一環として，言語面においていかに海外へのアスリート留学をサポートできるかの一例を示した。

研究成果の概要（英文）： In the present study, an English teaching method called the genre-based approach (GBA) was utilized to examine how Japanese football players and coaches improve their spoken English skills. GBA is characterized by its use of authentic teaching materials developed from real-life situations and incorporation of real tasks into the teaching curriculum; it was used over a 5-month period to teach spoken instructional English to 10 learners who wish to go overseas in the future. First, three questionnaire surveys (pre-, middle- and post-intervention) were conducted to examine whether the learners developed their awareness of generic linguistic structures and lexico-grammatical items specific to a football-coaching context in English. The results showed that there was a significant difference after the intervention and suggested that when using GBA, there are some learning items that are effective for explicit instruction.

研究分野：応用言語学

キーワード：選択体系機能言語学　ESP　応用言語学　アスリート留学サポート　ジャンルベースアプローチ

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究代表者自身､アメリカとオーストラリアサッカーリーグに選手として計 3 年間(2003、2009、2011)在籍しつつ、他の日本人選手・コーチたちの留学生活の実態調査をした経験を有する。その経過をふまえ、オーストラリア NSW 州にサッカー留学をした日本人選手にアンケートを実施した。結果、回答者の９割が「言葉に苦労した」と答えた (西条, 2014)。

昨今、海外サッカー留学生は、年間約 1,500 名にものぼる(辻, 2012)。海外の高等教育機関への留学支援体制の構築とその研究成果は、国内でもいくつか報告されている(高浜, 2007;大山, 2013)が、アカデミック以外の留学形態に対する支援体制構築及びその成果検証は未開拓分野である。そこで、本研究では、英語圏へのサッカーコーチング留学を見据えている日本人を対象とした「英語力向上プログラム開発」を目指した。

２．研究の目的

スポーツコーチングなど、実用的な分野における第二言語運用能力の育成には、従来のような文法・語法の解説を中心とした教材ではなく、現実の言語活動をより忠実に反映しているオーセンティックマテリアルの使用が提案されている (Goh & Burns, 2012)。本研究では、こうしたオーセンティックマテリアルを使用する英語教授法 *Genre-based pedagogy* (GBP)を用いることで、コーチング留学希望者の英語スピーキング能力を、ディスコース構築という観点でどのように向上させることができるかを検証した。

西条(2017)は、将来コーチング留学を計画している 2 人の英語学習者(日本サッカー協会スーパー少女プロジェクト GK コーチ、現役大学サッカー部生)に、実際に GBP を用いた言語指導を行い、次のような予備的研究結果を示した。

(1) 言語使用域の 3 要素 (field・tenor・mode)(Halliday, 1994)の中でも、特に tenor の領域で必要とされる「適切な発話機能・評価語彙の選択」を助長する効果がある。

(2) 指導されている選手がコーチの指示に迅速に対応できていない状況が多々観察された。この時のコーチング言語を分析した結果、選手に具体的な行動を取ることを促すための適切な叙法構造構築(動作主と動作内容の明暗示)を、常時変化するトレーニング状況に応じて形成できていない事が一因であることが分かった。

(3) 選手に望ましい行動を促進させるための称賛言語使用率(Martens, 2013)に関して、学習者のコーチング言語では、モデルコーチング言語と比較し極端に少なかった。

以上の結果から、場に応じた(実用的な)言語活動を行うためには、各々の言語活動を取り巻く社会的コンテクスト・状況変化に応じた語彙文法的資源を選択する必要がある事が分かる。言語教育においても、社会的コンテクストを無視した手法は、非実用的であると言わざるをえない。こうした問題点に関し、本研究では次のような解決策を考えた。

まずは､「サッカーコーチング」という社会的コンテクストがどのように言語現象として表出しているかを分析するため、実際に現場で使用された言語テクストデータを取得分析する。それによって明らかになった語彙文法的資源パターンを教材に反映させる。通常、特定の職業分野で使用されるテクストデータを取得するためには専門性のある企業などの協力が不可欠であるが、機密に触れる部分もあり、ESP 研究者を企業内に立ち入らせることについての抵抗感が強い(岩井, 2014)。しかし、代表者はすでに英語でサッカーコーチングをしている企業(株式会社 Naocastle)からの協力を得た。

GBP は、言語活動の「目的」に応じて語彙文法的資源を選択するトップダウン方式である(図 1)。一方、従来の日本の英語教育では、まず個別の語彙文法資源を学習するという点でボトムアップ方式だ(図 2)。一見、相反するようだが、「目的」に応じた適切な語彙文法的資源を選択するためには、各々の語彙文法的資源の特性を理解する必要がある。日本の英語教育では、すでにこの点に重点を置いているので、すでに出来上がった土壌を活用することができる。

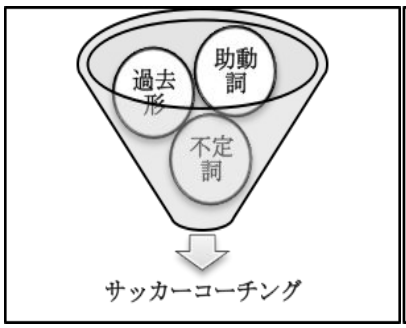


図 1 GBP 方式

目的に応じて、必要な語彙文法的資源を選択する

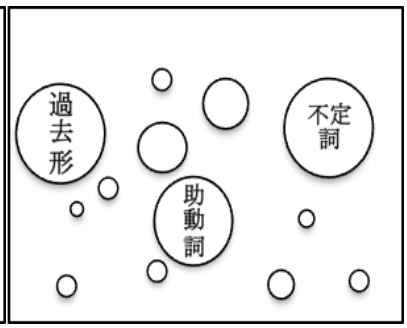


図 2 従来の英語教育

各々の語彙文法資源を個別に貯蔵してきた。

以上を踏まえ、本研究では、サッカーコーチングに必要な語彙文法的資源のパータンを明らかにし、その分析結果を言語指導に取り入れ、その効果と意義を検証することを目的とした。具体的には、研究期間内に以下の手順で研究を進めた。

(1)サッカーコーチングにおいて汎用性のあるトレーニング内容(基礎技術)時の言語テクストデータを取得し、それらの言語データが当該社会的コンテクストをどのように具現しているかを選択体系機能文法理論(SFG)分析の枠組みで解明する。
(2)分析によって得られた語彙文法的資源のパターンを教材に反映し、アーカイブ化をする。
(3)留学希望の大学生を対象に実践研究を開始する。実践後、得られた被験者たちのコーチング言語データと質問紙・面接調査の結果を分析し、GBP の指導効果および意義を検証する。

３．研究の方法

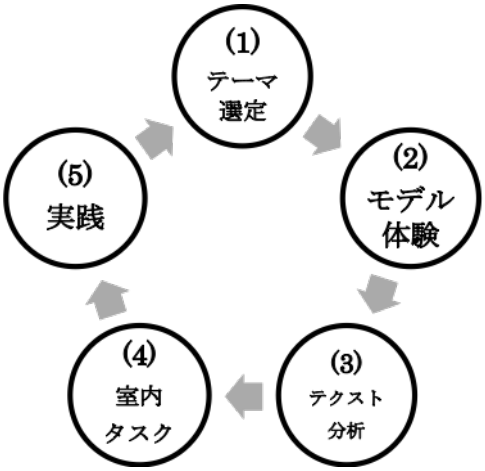
(1) 教材作成時に元となる言語データ取得(平成 28 年度)

GBP では、実際の社会的コンテクストの要素(field, tenor, mode)を学習内容に盛り込むため、実際に現場で使用された言語データを取得する必要がある。本研究では、英語でサッカー指導をしているプロコーチ今矢直城氏(株式会社 Naocastle 代表)の協力を得てデータ取得した。方法としては、基礎技術トレーニングを中心にテーマごとに、コーチング言語データと補足情報としての映像データを 10 回に分け取得した。

(2) GBP 実践研究 (平成 28～29 年度に継続)

当時、代表者が勤務していた立命館大学の自主ゼミ生 6 名を被験者とし、GBP の実践研究を全 12 回に渡り行った。右図は、GBP ハンドブック(Burns, 1996)に記載されている一般的な言語データの取得から指導実践までの手順を、本研究用に改定したものである。

図 3 本研究での GBP の手順



① テーマ選定: 作成したアーカイブの中から、被験者のニーズと合致する言語データを分析(選択体系機能文法の枠組みで)し、発見された語彙文法的資源パターンを教材に取り入れる。

② モデル体験: 被験者は、モデルコーチ(今矢氏)による英語コーチングを体験する。また、この時に事前実技テスト(ロールプレイ形式)を施し、言語データを取得した。

③ テクスト分析: ②で作成した教材を使用し、被験者に選定されたテーマのトレーニングを行う上で必要な言語上の特徴を情報構築パターン、field(どのような動詞を使うか), tenor(コーチがよく使う発話機能、叙法構造、称賛語彙は何か), mode(練習状況に応じてどのように的確な情報構造を形成するか)の観点を明示指導する。特に、「スポーツコーチングにおける基礎技術トレーニング指導」という言語使用域の特性上、a)言語活動従事者間における団結性・信頼性の確立(Martens, 2013)、b)多様な行動を促すための的確な言語使用(西条, 2014)を各々実現するための語彙文法的資源パターンを優先的に分析した。

④ 室内タスク: 学習者は、最終実技テストに向けて、③のテクスト分析の結果明らかになった語彙文法的資源パターンを踏まえ、自身のコーチング言語テクストを作成した。この際、学習者の理解度に応じて、教員がテクスト作成をサポートするようにした(Burns, 1996)。

⑤ 実践：ここでは最終実技テストを行う。実践内容は、事前実技テスト時の言語データと比較できるように、同レベル・テーマのものとした。この段階では、教員のサポート(スキャフォルディング)がない状態で行い、各々の被験者のコーチング言語データは、後の到達度評価のために記録した。

3．成果基盤型評価法による定着度調査 (平成 29 年度以降)

(1) GBP の効果を見るために、被験者の言語データを情報構築パターン，言語使用域の観点か

ら評価基準を作成した。また、「スポーツコーチング」の特性を考えた場合、言語活動のみならず、実際の身体活動も評価項目に入れることがより正確なタスク評価につながる。故に、双方を同時に評価することができる成果基盤型評価法(Brindley, 1998)を採用した。

(2) 評価基準に関して、2 人の評定者が、被験者のコーチング言語データを３段階数値的スケールを用いて評価する。また、タスクの達成状況の判断は、動画データも参照する。

(3)事前実技テストと最終実技テストにおける各々の情報構築パターンと言語使用域の平均点間において、有意差があるか計測する。

4．質問紙法・面接法を用いての GBP 効果認識調査（平成 29 年度以降つづき）

(1) 質問紙法(4 件法のリッカート尺度）を用いて、被験者たちの GBP 効果に対する認識調査をする。質問項目は、1)GBP 受講前にどの程度英語によるコーチング経験があったか 2)GBP 受講前と比較してどの程度英語によるコーチングが上達したか 3)GBP 受講前と比較してどの程度英語によるコーチングに対する考え方が変化したか。

(2) 被験者に対し、面接法による質的調査を実施した。この時、被験者たちには、過去２回に渡り実践してもらった時の映像を見てもらい、自分たちの英語によるコーチングスキルがどのように変化したか回答してもらった。なお、このデータは、質問紙法の量的統計結果を解釈する際の補助資料とする。

４．研究成果

2016 年度成果

2016 年度は、オーセンティック教材を作成するために、実際に英語によるサッカー指導を行っているプロコーチの Dan Gaspar 氏(イラン代表 GK コーチ)、今矢直城氏(株式会社 Naocastle)の協力の元、実際のコーチング言語データを取得し、選択体系機能言語学の枠組みで分析を行った。

Gaspar 紙のコーチング手法からは、以下のような教育的示唆が得られた。1.選手に即座に動作を行ってもらう場面では、命令法を用いる。2.叙法構造を確実に形成することで、コーチとしての自分の意図を明確にする。3.選手に指示をする場面では、命令法のみではなく、時には叙述法を使うことによって、「技術の説明」の意味合いも含めることができる。

また、今矢氏のコーチング手法に基づくならば、英語使用時における迅速なコーチング実践をするためには、トレーニング状況に応じた適切な叙法構造の構築（動作主と動作内容の明暗示）が不可欠であることが分かってきた。例えば、今矢氏は、動作に関する指示を与える際には、２つの文法パターンで指示を出していた。相手に命令を与える発話機能を持たせるための典型的具現パターンである imperative mood（命令法）と非典型的具現パターンである declarative mood（叙述法）である。この使い分けは、トレーニング中の場面（インプレー中かアウトオブプレー中か）に応じて、行っているという結果が導き出された。また、今矢氏は、モダリティを使い、自分の陳述にグラデーションを与えることで、選手たちにプレッシャーを感じさせないような要求の仕方をしていた。

2017 年度

2016 年度は、モデルコーチのコーチングテクストを選択体系機能言語学の観点から分析し、オーセンティック教材を作成することを主眼に置いた。当該年度では、実際にジャンルベースドアプローチを用いた実践教育プロジェクトを開始した。海外で英語を使ってサッカー活動をしたい日本人選手、コーチ１０名が集まり、約半年に渡ってデータ収集ができた。分析対象となったのは、６名であったが、彼らのタスクパフォーマンスを２回に分け評価をしてみたところ、２期間のうちに有意差が見られるほどの変化は見られなかったが、Field、Tenor、Mode の３観点に分け、評価をしてみたところ、Tenor>Mode という順に効果量に違いが見られた。Field においては効果量は検出されなかった。このように選択体系機能言語では、言語を３つのレイヤーを通して分析するが、各々の観点からタスクパフォーマンスを評価してみると、差異が見られたということは、指導方法を各々の状況に合わせて調節する必要性があることが分かる。こうした結果は、ジャンルベースアプローチを用いる際の重要な教育的示唆を与えると考える。また、本研究プログラムの受講生は、受講後には、アメリカ、オーストラリア、ドイツ、カンボジア、モンゴルへと各々渡航していった。本講座の内容が彼らに大きく影響を与えた結果である。

また、本研究の英語学習とスポーツを組み合わせるという手法は、民間機関も興味を持ち始めており、2017 年末には、２回ほどフットサル場の運営会社である株式会社メゾネットとコラボをして、一般にも公開された。いずれの会も３０人近くの参加者が集まり、好評を博した。

2018 年度
　2017 年前期に実施した研究プログラムの受講生たちは、アメリカ、オーストラリア、ドイツ、カンボジア、モンゴルへと各々渡航していった。当該年度は、彼らの現地での活動を調査し、研究プログラムの学習内容が、その後、彼らにどのような影響を及ぼしているか、インタビュー調査を行った。質問項目は、１.「現地での言語活動」と、２.「海外でのサッカー活動が与える心理的側面」に特化したものとする。具体的には、１.に関しては、(1) 海外のサッカー活動で困ったこと、(2) どのようなシーンで特に英語が必要だと思ったか、(3) 本研究プログラムを受講していて役に立ったこと、(4) 海外を実際に経験した今、本研究プログラムに取り入れるべきだと思った学習項目、(5) 今後の英語学習の方向性、の５項目となる。２.に関しては、(1) あらためて、なぜ海外に行こうと思ったのか、(2)今回実際に海外に来てみて、どんな感想を持ったか、(3) 海外で大変だったこと、(4) 海外の生活からは何か得られたこと、の４項目であった。
　現在は、１と２のインタビューデータをスクリプトに書き起こし、コーディング分析の準備をしている段階である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

西条　正樹、ジャンルベースドアプローチを活用した目的別英語（ESP）教育による口語文法指導の実践報告――日本人サッカープレーヤー・コーチの海外挑戦をサポートするために――、立命館人間科学研究、査読有、第 38 号、2019、121-133
http://r-cube.ritsumei.ac.jp/repo/repository/rcube/11551/gl_38_nishijo.pdf

Masaki Nishijo、Extracting context-based lexico-grammatical features using interpersonal metafuntional analysis: Toward language instruction for overseas football coaching、Doshisha Literature、査読有、第 61 号、2018、43-69

Masaki Nishijo、Teaching Instructional Spoken English to a Japanese Football Coach Using the Genre-based Approach、JABAET Journal、査読有、第 21 号、2017、61-76

西条正樹、特定目的の英語（ESP）教育における対人的メタ機能分析の活用事例 ―海外でのサッカーコーチングのための言語指導を目指して―、 立命館言語文化研究、査読有、第 28 号、2017、245-268
http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf_28-4/lcs_28_4_nishijo.pdf

〔学会発表〕（計 7 件）

西条正樹・亀本真朱、スポーツと語学を組み合わせた ESP 教育に向けて―教授法の理論的背景とカリキュラム作成―、第一回 JACET SIG アカデミックリテラシー研究会、2019

西条正樹、ESP/EAP 分野の国際的な研究動向と質的研究手法の使用：アカデミックリタラシーとジャンルアプロー チの事例研究、2018 年度大学英語教育学会（JACET）関西支部大会、2018

西条正樹、ジャンルベースドアプローチを活用した目的別(ESP)教育による口語文法指導の実践報告 -日本人サッカープレーヤー・コーチの海外挑戦をサポートするために-、大学英語教育学会第 57 回国際大会、2018

西条正樹、学生の興味と自律学習を促す外国語コミュニケーションルームの取り組み ―サッカーレクを通した英語スピーキング指導の実践報告―、言語教育エキスポ 2017、2017

長尾明子・西条正樹・上條武、大学英語クラスにおける授業研究のアプローチとは: 社会文化理論による研究ケースと考察、2017 年度大学英語教育学会（JACET）関西支部春季大会、2017

西条正樹、プロサッカーコーチングテクストの対人的・テクスト形成的メタ機能分析 - 特定目的の英語（ESP）教育への応用を目指して -、第 25 回日本機能言語学会秋季大会、2017

西条正樹、ジャンルベースアプローチを活かしたスピーキング指導の実践報告～海外でのサッカーコーチ実践を見据えて～、2016 年度大学英語教育学会（JACET）関西支部春季大会、2016

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
https://nagao25.wixsite.com/sflgroup

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：ダン・ガスパー、石原千晶、今矢直城、森安洋文、オリバー・ウェルマン
ローマ字氏名：Dan Gaspar、Chiaki Ishihara、Naoki Imaya、Hirofumi Moriyasu、Oliver Wellman

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。